

# KSCA 会報

Vol.19 2020.2.20

## 目次

### PAGE 1

(1) 教員の勤務環境  
と支援スタッフに関する  
実態調査

### PAGE 1-2

(2) 小学生対象  
のワーク

### PAGE 3-6

(3) 書籍紹介

### PAGE 6

(4) KSCA連絡先

## (1) 教員の勤務環境と支援スタッフに関する実態調査

中野 早苗

文科省の科研費助成による研究会に2年ほど研究協力者として参加していたのですが、2018年末に最終報告書が完成しました。

テーマは「教員の勤務環境と支援スタッフに関する実態調査」で、SCの他様々な非常勤支援スタッフを取り上げ、教員や支援スタッフへのアンケート調査やヒアリングの結果を分析考察したものです。

私はSCの項を担当しました。

下記の要領でネットでお読みいただけますので、お時間のある時にでもご高覧いただければ幸いです。

記

「教員の勤務環境と支援スタッフに関する実態調査」で検索→「調査報告」をクリック→

「●調査結果最終報告 - Final Reports -」

↑ここから閲覧できます。

アドレス：

<http://wksp.co.jp/teachers&staffs-2016/index.html>

## (2) 小学生対象のワーク

林 幹夫

みなさんはスクールカウンセラーとして、児童生徒に授業を行ったことがありますか？ 私は今までに、小学生に「友だちのつくりかた」「自分を知る・相手を知る」「ストレスに強くなろう」、中学生に「コミュニケーションスキルを高めよう」「ストレスへのつきあい方」「アサーションって、なに？」、高校生（定時制）に「やさしさコミュニケーション」というテーマで授業を行ったことがあります。今回はその中で、小学生を対象とした「友だ

ちのつくりかた」という授業についてご報告します。

この授業は14年前、当時私が勤務していた小学校の6年担任から「道徳の授業で、児童にコミュニケーションのワークを行ってほしい」と依頼されたのが始まりです。そして次に勤務した小学校では養護教諭の依頼で5、6年対象と少し広がりしましたが、実施はいずれもクラス単位でした。しかし今年度勤務している小学校では先日、養護教諭から「学校保健委員会で行いたいから、3～6年（各2クラス）対象に、体育館でいっぺんに行ってほしい」と依頼されまし

た。依頼された時の私の感想は、「229人同時か。できるのか!？」というものでした。

結論から言うと、なんとかできました。内容はクラス単位の時と同じで、「友だちをつくるコツ」「あいさつのたいけん」「あいての話を聞きたいけん」「あいての名前をよぶたいけん」「かんそう」です。お気づきの通り、今回は小3も対象にするので、レジュメはひらがなを多めにしました。また、多くの担任の先生にフォローしてもらう必要があるため、事前に「友だちのつくりかた・実施にあたって」というプリントを各担任に配布し、ワークの内容、お願い、留意点などを伝えました。各ワークの直前には、マイクで児童に説明するとともに、ステージ上で養護教諭等とお手本を見せました。

実施中は、体育館に集合したり、4人1組になったりするのに時間がかかりましたが、それ以外は特に大きな問題はありませんでした。さすが小学生のエネルギーは絶大で、どのワークも楽しんで活動してくれました。感想もたくさん書いてくれた児童が多く、特に転入生の子から「どうすれば親友になれるですか? 友だちの仲を深めるにはどうすればいいですか?」という質問を受けたのが嬉しく、もちろん丁寧にお返事をしました。

今後、その小学校では12月に人権学習会で1～6年(!?)を対象に「自分を知る・相手を知る」、2月に学校保健委員会で「ストレスに強くなろう」というテーマで授業を行う予定です。準備は大変で、当日は緊張しますが、自分を成長させる機会を与えてくれるので、依頼があるのはありがたいことだと思っています。

公立のスクールカウンセラーが常勤化されるのはまだまだ先になりそうですが、常勤化された際には、「児童生徒に授業ができる」という能力は、スクールカウンセラーの必須事項になるかもしれません。今からその力を磨くのも、悪くはないでしょう。

〇〇年〇月〇日 〇時間目  
( ) 年 ( ) 組 ( ) 番 名前 ( )

## 友だちのつくりかた

スクールカウンセラー 林 幹夫

### 1. 友だちをつくるコツ

- ①あいさつをする
- ②あいての好きなこと・ものについて話を聞く
- ③あいての名前をよぶ
- ④ ( )
- ⑤ ( )
- ⑥ ( )
- ⑦ ( )
- ⑧ ( )
- ⑨ ( )

### 2. あいさつのたいけん

- ①しゃべらないで体育館の中を歩き回り、あいてと目が合っても目をそらす
- ②しゃべらないで体育館の中を歩き回り、あいてと目が合ったら、かるくおじぎをする
- ③体育館の中を歩き回り、あいてと目が合ったら、あいさつをする
- ④体育館の中を歩き回り、あいてと目が合ったら、あいさつとハイタッチをする

### 3. あいての話を聞きたいけん

- ①自分の好きなこと・ものを書く→ ( )
- ②4人1組になる
- ③ジャンケンをして、じゃんばんを決める
- ④1番の人に、ほかの人が1番の人の好きなこと・ものについてしつもんする
- ⑤1番の人がしつもんには、答えに「はい」と言ってもOK  
(答えにくいしつもんには、「答えにくいです」と言ってもOK)
- ⑥あいずをしたら、2番の人にこうたいする

### 4. あいての名前をよぶたいけん

- ①体育館の中を歩き回り、「〇〇さん、サインをください」と言う
- ②言われた人は、あいての紙(このプリントのうら)に自分の名前を書く
- ③サインをした人は、「〇〇さんもサインをください」とあいてに言う
- ④おたがいにサインをし合ったら、「私の好きなこと・ものは～です」とつたえ合う
- ⑤できるだけ多くの人とサインをし合う

### 5. かんそう

- ☆もう1枚プリントをくばるので、それに書いてください

(3) 書籍紹介

1) 村田沙耶香『コンビニ人間』文春文庫 を読んで

稲垣 智則

ハンス・アスペルガーは、自身が発見したある種の症状を持つ人々について「そう、彼らは知的な機械人形（オートマタ）なのです」と記した。彼が発見した症状は、かつてアスペルガー障害と呼ばれ、現在は自閉症スペクトラム障害と呼ばれている。

『コンビニ人間』は、いわば「自閉症スペクトラムにある三十六歳の女性がコンビニでバイトをし続けて暮らしていることについて、一人称で語っている内容」である。とても良くできていると思う。

自閉症スペクトラム障害の人々が一人称で見た世界を綴っている書籍でいうのであれば、泉流星『僕の妻はエイリアン——「高機能自閉症」との不思議な結婚生活』（新潮文庫）、グランディン『我、自閉症に生まれて』（学研）、ドナ・ウィリアムズ『自閉症だったわたしへ』（新潮文庫）が有名であろうか。しかし『コンビニ人間』は、自閉症スペクトラムの性質が小説として、しかも一人称の語りとして成立していることが重要である。登場人物の一人ではない。一人称の語りで、世界の見え方がそのまま記されている。たとえば、統合失調症的な「自閉」における一人称での語り記されている小説でいうのであれば、フィリップ・K・ディック『ジャック・イジドアの告白』（ハヤカワ文庫）がある。あるいは精神遅滞での一人称から知的に高水準の一人称にグラデーションしていく離れ業、ダニエル・キイス『アルジャーノンに花束を』（ハヤカワ文庫NV）も存在する。このような、構築度の高い、通常は想像することが難しい一人称で地の文を書くことができる作家はとても限られている。

内容の話に移ろう。おそらく『コンビニ人間』において重要な点は、“もし自閉症スペクトラム的なあり方の方が「多数派」になった場合、通常の「オスとメス」たちは排除されるであろう”ということを提示していることである。滑稽さは単に多数派少数派の問題であること、そして現在の日本は、少なくと

も自閉症スペクトラム的なシステム（SF的な、滅菌され管理された世界観）が実際に動き始めている、ということである。その象徴的な場所がコンビニである、という扱いなのであった。そしていつ多数派と少数派が入れ替わってもおかしくないという示唆である。

『コンビニ人間』の中から、自閉症スペクトラム障害的な部分をいくつか抜き出してみる。

＜私はバックルームで見せられた見本のビデオや、トレーナーの見せてくれるお手本の真似をするのが得意だった。今まで、誰も私に、「これが普通の表情で、声の出し方だよ」と教えてくれたことはなかった。＞（p.20）

＜完璧なマニュアルがあつて、「店員」になることはできても、マニュアルの外ではどうすれば普通の人間になれるのか、やはりさっぱりわからないままなのだった。＞（p.26）

＜二人が感情豊かに会話をしているのを聞いていると、少し焦りが生まれる。私の身体の中に、怒りという感情はほとんどない。人が減って困ったなあとと思うだけだ。＞（p.34）

＜私はミホの子供も甥っ子も、同じに見えるので、わざわざこっちのほうも見にこなくてはいけないという理屈がよくわからない。でも、こっちの赤ん坊のほうが、大事にしなくてはいけない赤ん坊なのだろう。私にとっては野良猫のようなもので、少しの違いはあっても「赤ん坊」という種類の同じ動物にしか見えないのだった。＞（p.60）

＜「コンビニに居続けるには『店員』になるしかないですね。それは簡単なことです、制服を着てマニュアル通りに振る舞うこと。世界が縄文だというのなら、縄文の中でもそうです。普通の人間という皮をかぶって、そのマニュアル通りに振る舞えばムラを追い出されることも、邪魔者扱いされることもない……つまり、皆の中にある『普通の人間』という架空の生き物を演じるんです。あのコンビニエンス



トアで、全員が『店員』という架空の生き物を演じているのと同じですよ」> (p.95)

ハンス・アスペルガーが記すように、主人公古倉さんを、通常の「オスとメス」のふりを必死で続けている「機械人形」であると考えれば、このあたりの理解は容易になる。当然であるが、自閉症スペクトラム障害の人々は人間であり、機械ではない。あくまで機械人形「的」な人々、カッコ付きの「機械人形」である。自閉症スペクトラム障害の性質は機械人形を想定すれば理解しやすくなる、というだけである。ここは十分に注意しなければならない。

機械人形に近いということは、いわば、ヒトとモノの区別がうまくつけられない状態で日々を過ごさざるを得ないということでもある。アニミズム的にすべての事物を擬人化する方向で区別がつかないということではない。その逆方向、つまりヒトがモノ化してしまった世界に生きざるを得ないということである。だから古倉さんは、「友人の子ども」と「妹の子ども」、どちらも単に「赤ん坊」という一つの種類の動物にしか見えず、どちらの方を重視しなければならないのかが理解できないということになる。その区別を自明としている世界で生きなければならない古倉さんの苦しみはいかほどか。そして、「友人の子ども」と「妹の子ども」をどちらも単に「赤ん坊」という動物としてとらえることが自明の世界になった場合、現在の多数派の人々はどうなるのか。背後霊を見ることが出来る人々が多数派になった世界を想像しても良い。背後霊を見ることができない個人はどのように生きることを強られるか。私たちは常に、自分の持つ性質が少数派であっても生きていけるシステムを考え続けなければならない。

再度、『コンビニ人間』の内容に戻る。古倉さんが世界を理解する方略が「プログラミング的」であることも特徴であろう。確かに論理的である。Aである、ならばBである、ゆえにCである。古倉さんの思考は、このような直列悉皆型処理の末に結論に導かれる。「コンビニに居続けるには『店員』になるしかない」→「制服を着てマニュアル通りに振る舞う」→「マニュアル通りに振る舞えばムラを追いつかれることも、邪魔者扱いされることもない」。それはモノの世界である。相手の気持ち、情緒、そういったものは除外されている。機械人形同士のやり

取りならそれで十分である。そしてコンビニは、機械人形的世界観と相性が良い。

<ここ（引用者注：コンビニ）は強制的に正常化される場所なのだ。異物はすぐに排除される。> (p.64)

<「あの……修復されますよ？」……コンビニは強制的に正常化される場所だから、あなたなんて、すぐに修復されてしまいますよ。> (p.73)

<「あの年齢でコンビニバイトをクビになるって、終わってますよね。あのままのたれ死んでくれればいいのに！」／皆が笑い声をあげ、私も「そうですね！」と頷きながら、私が異物になったときはこうして排除されるんだな、と思った。> (p.76)

機械によって支配され、データによって管理され、情緒が入り込む余地の無い滅菌された世界。SFでは常にこのような世界観が用いられて来た。マトリックス。ターミネーターの未来世界。同じである。それらは私たちを怖れさせる。人間が、機械の部品とされてしまうから。人間性が消されてしまうから。

しかし、機械人形的な生き方を好む人々にとっては理想的な世界ではないか？ だから古倉さんは、コンビニで働き始めて、ようやく「生まれた」と感じる。

<そのとき、私は、初めて、世界の部品になることができたのだった。私は、今、自分が生まれたと思った。世界の正常な部品としての私が、この日、確かに誕生したのだった。> (p.25)

今のところ機械人形的な生き方を好む人々、カッコ付きの「機械人形」は少数派である。しかし世界はコンピューターによって管理され滅菌されたシステムへと移行しつつある。ならば、「機械人形」の方がはるかに適応できる社会システムに近づいているではないか。現に今、コンビニは「そういう場所」である。

現段階では「機械人形」は少数派なので、「正常な世界はとて強引だから、異物は静かに削除される。まっとうでない人間は処理されていく」、その対象になり得てしまう。「まっとう」ではない、と判断されてしまう。しかし、コンビニのあり方が多数派となったときにはどうなるであろうか。「コン

ビニは強制的に正常化される場所だから、あなたなんて、すぐに修復されてしまいますよ」。それは、現在多数派の「まっとう」とな人々のことを指しているのではないか。それが現在多数派の「オスとメス」のことではないか。

システムにおいて少数派の異分子は排除される。あるいは修復される。ただ、多数派か、少数派か、というだけなのである。単に、人数の問題でしかない。

誰のことも笑えない。いつ自分が「排除」の対象になってもおかしくない。私はそういう切迫を感じる。

自分の本質が異物であると自認するとき、システムの中で生きていくためには偽装せざるを得ない。一般人のフリ、多数派のフリをせざるを得ない。

しかし、いつ、誰であっても、少数派になり得る。その可能性を絶対的に排除することはできない。

たとえば、老化すれば、確実に身体能力は衰える。事故にあえば身体部位を失う。聴覚や視覚などいつ失ってもおかしくない。脳挫傷を起こせばいかなることでも起こり得る。いつ自分が「少数派」になってもおかしくないのである。今日かもしれない。明日かもしれない。その可能性を思えば、「少数派であっても生きていける場所」を確保しておかなければ、自分自身が困ってしまうのではないか。

私が想定しているのは「多くの人々」のことではない。自分自身のことを考えている。私は、共生であるとか、思いやりであるとか、そういうことを上から目線で言える立場にいない。私は、私のために、少数派が生きていても大丈夫なシステムを構築しておきたいのである。

## 2) 柵園正一『学校へ行けない僕と9人の先生』双葉社 を読んで

林 幹夫

この自伝的漫画の初版は2015年ですが、今でも新聞広告が出て、有隣堂の話題書コーナーに並んでいます。また、朝日新聞の「#withyou ～きみとともに～」のコーナーでも、この漫画や柵園さんのことが紹介されました。

私も有隣堂で見かけるたびに気になって、売り場

にあった第1話だけが読める小冊子を立ち読みすると、とんでもない先生が出て来ました。それは小1の担任（女性）で、主人公が勇気を出して「わかりません」と言うと、いきなり平手打ち。もう一度「わかりません」と言うと、今度はグーパンチ（なぜそうなったのか、第2話で先生の事情が明かされますが、これがまたひどい）。いやいやいや、こんな先生いるか？ うーん、舞台は1989年の愛知県か。いたかもなあ（愛知県出身の方、ごめんなさい）。今ではないことを祈ります。「この物語は作者の実体験を基にしたフィクションです」と書かれているものの、おそらくほぼノンフィクションでしょう。

この先生が衝撃的過ぎて、たまらずこの漫画を買おうと、こんな調子で良かれ悪しかれ個性豊かな先生たちが、続々と出て来ます。毎朝車で友人を連れて迎えに来る先生。不登校の不利益を、身をもって体験させる先生。勉強はそこそこで、ひたすら一緒に遊ぶ大学生の家庭教師。その中でも私が一番好感を抱いたのは、小5、6年担任の石黒先生（男性）。この先生、外見はや○ザ（注：本文からの引用です）だが、足しげく家庭訪問し、言葉がけは素っ気ないながらもあったかい。たとえば「なあ、たのむからさー、学校来てくれよ。来てくれたら本当に嬉しいんだけどなー」。間違いなく登校刺激で、関係次第では嫌だろうけど、信頼している先生からこんなことを言われたら、嬉しいでしょうね。

この漫画は主人公の傷を中心に、先生や親の言っではいけない言葉、効果的だった関わり方、友人やいじめへの複雑な思い、主人公の浮き沈みや汚い部分などが、余すところなく描かれています。いじめを止める存在である、「スイッチャー」（いじめの最中に、意図的に全体の雰囲気を変えて、いじめを止めること）の子も出て来ます。そのため、スクールカウンセラーとして、いじめられている子を支援する時に、非常に参考になります。元当事者の心情が生き生きと描かれていて、とても貴重です。

ただ、不登校児童生徒への支援において難しいのは、逆境が人生の中で必ずしもマイナスになるとは限らないということです。柵園さんも、もし不登校を経験していなければ、少なくともこの漫画は描けませんでした。ひょっとしたら最終話の先生との出会いもなく、漫画家にもなれなかったかもしれません。この漫画には嫌な先生やひどい友人、忘れたいであろう経験がたくさん出て来ますが、もしそれら

を全て取り除いていたら、棚園さんはごく普通の大人になっていたのではないのでしょうか？

もちろんわざと子どもを苦しめることは許されないし、困難な状況には支援が必要ですが、もし関わるのが難しく、支援の手が届かなくても、「それはそれで申し訳ないが、今後何とかバネにしてほしい」と遠く願うことで、その子の将来に望みを託すのもアリだと思います。子どもに関わることができればそれに越したことはありませんが、強迫的に「何が何でも支援する」のは息苦しいので、「基本、君が主人公なんだから、君の力で何とかして行くんだよ」というメッセージを伝えるような、謙虚

さと思慮深さが必要です。というか、それしかできないことがほとんどかもしれません。

2016年に、文部科学省が「不登校は問題行動ではない」ということをやっと言い始めましたが、今後、「実は大学院出てるんです」と同じ軽さで、「実は不登校してたんです」と言えるような、そんな時代が来れば良いと思います。それまで当事者は自分の経験をどんどん語って、支援者はその声にフンフン耳を傾けて、相互理解を深めて行きましょう。それが今です。

#### (4) KSCA連絡先

**メール：**[office\\_KSCA@yahoo.co.jp](mailto:office_KSCA@yahoo.co.jp)

**ホームページ：**<http://www.ksca.info/>

**(google検索：「神奈川県スクールカウンセラー協会」)**